

# 天 皇 杯 受 賞

この地には、心を満たす「土」がある 心を潤す「水」がある

受賞者 た しろ じ ち かい 田代自治会  
みやざきけん  
 (宮崎県えびの市)

## ■ 地域の沿革と概要

えびの市は、南九州のほぼ中央に位置し、熊本県及び鹿児島県の県境に接している。総面積は283km<sup>2</sup>で、東西約26km、南北約22kmに及び、平均標高約230mの盆地状の田園都市である。

交通網は、JRが2線、国道が3線のほか、九州縦貫自動車道及び宮崎自動車道が通り、宮崎方面と鹿児島方面への分岐点であることから、宮崎県の西の玄関口として交通の要衝となっている。

市の南部には、日本で最初の国立公園に指定された「霧島錦江湾国立公園」の北部に位置する「えびの高原」が広がり、その周囲に韓国岳、甑岳、飯盛山などの山々が連なっている。

また、市の北部には、九州山脈の南端にある矢岳、鉄山などが連なっており、これらの山々に囲まれた市の中央部には南九州最長の一級河川である川内川が西流する「えびの盆地」が広がっている。

えびの盆地では、主として鹿児島県内に分布する「田の神さあ」(冬は山の神となり、春は里に下りて田の神となって田を守り、豊作をもたらす神様)信仰が見られる。

また、当盆地では、水稻栽培のほか、和牛繁殖、肥育、乳牛、養豚などの畜産業が盛んである。

第1図 位置図



注：白地図KenMapの地図画像を編集

第1表 地区の概要

事 項	内 容	
地区の規模	集落	
地区の性格	地縁的集団	
農 家 率 (内訳)		43.5%
	総世帯数	124戸
	総農家数	54戸
専兼別農家数 (内訳)	専業農家	19戸
	1種兼業農家	2戸
	2種兼業農家	10戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積	147ha
	耕地面積	82ha
	田	43ha
	畑	39ha
	耕地率	55.8%
	農家一戸当たり耕地面積	1.5ha

## ■ むらづくりの概要

### 1. 地区の特色

田代集落は、えびの盆地の南西辺縁部に位置し、地区内の住民で管理する湧水を利用した水稻栽培や、<sup>あまみやだいち</sup>天宮台地上部での野菜栽培、畜産業等が盛んな地区である。

田代集落の総世帯（124戸）のうち、44%にあたる54戸が農業を営んでおり、そのうち、約7割が兼業農家である。

集落内の82.9haの農地では、主に普通期水稻を中心とする複合経営が行われている。例えば、水田においては水稻以外に飼料作物の作付けが、畑においては露地、施設園芸が盛んで里芋やほうれん草を始めとしてピーマンやイチゴの作付けが行われ、多種多様な経営が展開されている。

また、水稻については、減農薬・減化学肥料による特別栽培に取り組むなど、高品質米の産地として県内屈指の高い栽培技術を有している。

### 2. むらづくりの基本的特徴

#### (1) むらづくりの動機・背景

江戸時代、当集落の位置する地域を領地下とした薩摩藩では、困窮する藩財政を立て直すために開田を奨励していた。地域に湧き出る豊富な水に目を付けた当時の人々が、稲作を行うためにこの地に移り住んだことが当集落形成の始まりである。

しかし、当時の利水技術では水不足を抜本的に解消するには至らず、明治時代初期には、集落内にある<sup>あまみやじんじや</sup>天宮神社付近の水源から天宮台地の地下を通る<sup>あまみやずいどう</sup>手掘りの地下水路（天宮隧道）が建設され、農業生産の安定に大きく寄与したと伝承されている。

以後、水と土地に対する畏敬・感謝の念は、湧水池や農地を始めとする集落資源とともに脈々と集落住民に引き継がれてきたものの、農業生産や生活環境の基盤整備の遅れなどから、次第に若者の離農や集落からの流出が進み、今後の営農の継続、集落機能の維持に対し、農業者個々の不安感が強まっていた。

このため、昭和50年頃、住民が安心して営農し、暮らせる集落を実現するため、自治会が中心となり、「営農維持」「資源保全」「情報発信と交流」の3つの目標を立て集落機能の維持回復のための活動を開始した。まず、災害復旧事業により、度々崩落していた「天宮隧道」の補強工事を実施した。本事業の実施により、住民の営農維持への意識が徐々に変化し、地区内に散在する狭小な区画のほ場を整備しようという機運が高まっていた。

次に、平成4年度から、集落総意の下、市内の他地域に先駆けて「中山間地域農村活性化総合整備事業」を活用し、30a区画へのほ場整備、用排水路の整備、簡易水道設備の設置、道路網の整備、水源である「陣の池」の周辺環境整備等が一体的に行われ、現在の農村集落環境の基盤が構築さ

れた。

また、この基盤整備の過程における換地計画の策定等を通じた集落の話し合い等により、集落内農家の意思疎通が密に行われたことから、住民間に、集落の農地は集落で守るといった意識が芽生えることとなった。そのことが、現在の集落営農の取組に向けた礎となり、集落の活性化に向けた現在のむらづくり活動のスタートと言えるものとなった。



写真 1 田代自治会の皆さん

## (2) むらづくりの推進体制

田代集落の住民が安心して営農し、暮らせるむらづくりの実現のため、田代自治会では、主に以下の組織が連携を図りながらむらづくり活動を推進している。

### ア 田代集落協定

「中山間地域等直接支払制度」に取り組む組織として、平成12年8月に集落内の農業者7名が協定を締結して結成された。

集落内の条件不利農地1.2haと、これに係る道路、水路の保全管理を実施している。

### イ 田代ホタル湧水の里保全クラブ

「農地・水環境保全向上対策事業」の推進母体として、平成19年3月に結成された。

農業者45名に加え、非農家組織である地区婦人部、高齢者クラブ、子ども育成会、消防団などから構成されており、農地の現状見回り、施設の点検補修、地区内の草刈りや泥上げ等を実施している。

当初は、管理している50haの農地のうち、交付対象は25haであったが、現在は、地域ぐるみでの活動体制が整ったことから、交付金の交付を受けず、独自に取組を継続している。

### ウ 田代農用地利用組合

平成19年10月に設立され、前原良一組合長を中心に11名で構成されている。

地区内の対象面積25haのうち約4haの農地について作業を受託し、耕作放棄地発生防止のため、農地の管理等の取組を行っている。

## エ ひまわりロードプロジェクト

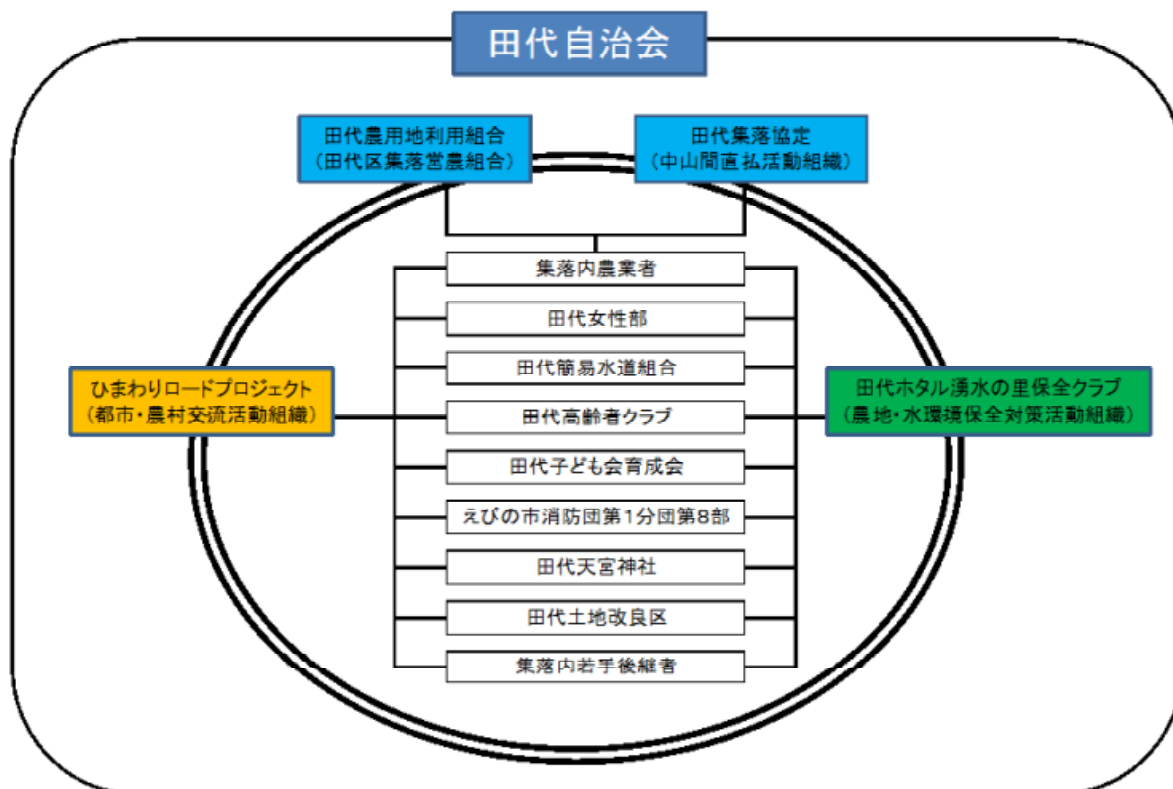
「田代ホテル湧水の里保全クラブ」の取組が開始されたことを契機に、平成21年4月、高齢化しつつある自治会幹部の助言を受け、集落在住の若者間の連携促進、世代間交流の促進、地域活性化に取り組むことを目的に当組織は発足した。

当組織は、農家・非農家に関わらず、集落在住の若者であれば年齢制限等はなく参加可能であり、現在、集落へのUターン・Jターン者や新規就農者を含む23名（年齢構成21～44才・うち女性6名）で活動している。

ひまわりロードプロジェクトでは、各種取組の具体化に際して、若者である会員の発案を集約し、自治会の了承を得ていることから、集落内の各世代間の意識をつなぐ仲介役としての機能も有している。

その他にも、サテライトと呼ばれる高齢者への給食事業等を行っている「女性部」や、集落の未来の担い手である子どもたちの健全育成を図るために組織された「田代子ども会育成会」などが、活発に活動を行っている。

第2図 むらづくり推進体制図



## ■ むらづくりの特色と優秀性

### 1. むらづくりの性格

当集落のむらづくりにおいて特筆すべき点は、陣の池、天宮神社や用排水路、ほ場といった、集落の営みを形づくる地域資源の守るべき価値を峻別・助言できる老年世代と、新たな発想で農村生活に楽しさや豊かさをもたらす若年世代が相互に影響しあい、特に若年世代の情熱的な取組が原動力となって、農業の活性化、若者の定住化等につながっていることである。

田代自治会では、湧水を大切にするという集落としての強い認識の下、地域の基軸である農業生産活動を維持するために、他地域に先駆けた事業を通して活動の体制整備を行っている。

また、集落外から帰ってきた若者たちが団結し結成した「ひまわりロードプロジェクト」の活動による他地域との交流、地区内外への情報発信、合意形成への寄与、集落内の連携、世代間の交流の広がりなどは、現在の集落の諸活動が活発化する原動力となっている。

さらに、地域の起源である「水」に対する感謝の念や「田の神さあ」への信仰心など、郷土を守ろうという世代を超えた共通の価値観の下、集落を構成する年配者と若者、女性が同じ目線に立って伝統文化の継承等に取り組んでいる。

### 2. 農業生産面における特徴

#### (1) 持続的かつ安定的な農業生産活動の体制整備

田代集落では、水底まで見える青く澄んだ水を湛える「陣の池」の豊かな湧水を水源として、「ヒノヒカリ」等の水稻栽培が盛んに行われてきた。

しかしながら、地区内の農家は、第2種兼業農家や自給的農家の小規模経営が多くを占め、ほ場についても、傾斜地での水持ちを確保するため、不整形の



写真2 陣の池の小池（湧水池）

狭小田に各戸の持ち分が散在しており、生産効率が極めて低いという課題があった。そのため、平成4年度から「中山間地域農村活性化総合整備事業」に取り組み、農業基盤の整備と所有区画の整理を行った。

この基盤整備等により、通作距離の短縮等作業効率の向上が図られ、事業前には、市の平均農業所得の7割程度であった集落の平均農業所得も、現在では市の平均並の水準となった。（田代集落農業所得推移 H2:164万円→H22:180万円）

また、平成19年度から開始した「農地・水環境保全向上対策」への取組を通じ、地区内の資源は全て地区住民の財産であるとの考えの下、今後の

高齢化に対応するための環境づくりを進めようとする気運が高まり、農作業受委託の窓口・受け皿として、平成19年10月に「田代農用地利用組合」が組織された。

現在、5名のオペレーターにより、水稻、飼料作物等を中心に、植付け、収穫、畦畔管理等を作業受託しており、その面積は年々拡大している。

(作業受託面積 H19：延べ1 ha → H24：延べ8 ha)

これまで、将来の営農継続に不安を抱えていた高齢農家等にとっては、地区内の農作業委託先が明確になったことと、受託作業に従事するオペレーターに若者が多く、10年先を見通した農業経営に目処が立つことによって、将来への安心感を与える存在となっている。そして、組合が地域農業の担い手として中心的な役割を果たしていることによって、現在のところ、地区内には目立った耕作放棄地は確認されていない。

## (2) 地域ぐるみでの農業用施設の管理

平成4年度からの「中山間地域農村活性化総合整備事業」の実施を契機に、農業者間の結束が強まり、農地や農業用施設の維持保全活動は活発になったものの、保全管理活動は農業者が行うべきものという考えが非農家では根深かった。

しかしながら、農業従事者が徐々に高齢化する中、これまでの農業者単独での保全管理活動は限界に近づきつつあり、現状に対する危機感が次第に高まっていった。

このような中、平成12年度に「中山間地域等直接支払制度」が創設され、田代集落においても事業を実施するための取組が開始された。

取組開始当時は、非農家の理解を得ることが難しかったが、自治会活動などを通じて、集落にとっての施設管理の重要性等を地道に説明することにより、集落内の資源は全て集落住民の財産であるとの認識が非農家でも高まった。そして、平成19年度に創設された「農地・水・環境保全向上対策」の円滑な実施につながっている。

現在は、農道や水路の整備、周辺隣地の草刈等、一人では困難な保全管理活動を集落住民総出で実施している。あわせて、非農家等も積極的に話し合いに参加し、様々な協力体制の下で農村環境の保全や耕作放棄地の発生防止に積極的に取り組んでいる。

## (3) 今後の農業を支える後継者の確保

田代集落の認定農業者数は、平成19年の4経営体から現在では13経営体に増加している。このうち、11経営体には後継者がおり、5経営体では既に20代から40代の後継者への経営移譲がなされている。

また、後継者の中には、機械オペレーター等の農作業受託会社を立ち上げるなどの新たな経営展開を図る者がいるほか、異業種から農業に参入した若者が自分で営業を行って販路を開拓するなど、新しい農業の展開が図

られている。なお、「ひまわりロードプロジェクト」のメンバー同士がそれぞれの夢を語り、共有したことが、新しい農業展開の契機となっている。

さらに、最近では、えびの市において開催されたグローバルGAPに関する講習会に集落の若手後継者が3名出席するなど、安全で信頼性の高い農産物の提供等を念頭に置いた新しい動きが始まっている。

### 3. 生活・環境整備面における特徴

#### (1) 集落を愛する若者たちによる情熱あふれる活動

従来、田代集落の若者は、就職などのために集落外に居住している者が多かった。しかし、子どもの頃、自分たちのために運動会や祭りなどの行事に一生懸命に取り組んでくれた親の背中を見て育ったことから、自分たちも集落に居住し、同じような活動をしたいという気持ちを持っていた。その若者たちが、自分たちの子どもを田代集落の豊かな自然の中で育てたいとの思いから、ここ10年ほどの間に田代集落へ帰ってくるようになり、「農地・水環境保全向上対策事業」などに参加するようになった。

そうした若者たちの姿を見ていた自治会長の「若いもんたちで何かやってみらんか」という一言をきっかけに、集落の若者全員が集まった飲み会が開催された。その中で、「若手だからこそできることがあるはず」、「取り組む以上は、もっと自分たちも楽しみたい」といった発言があり、内に秘めていた想いを爆発させた若者たちの団結が実現した。

このことをきっかけに意欲的な話し合いが開始され、平成21年に、若者の連携と世代間交流の促進、地域活性化への取組を目的とした「ひまわりロードプロジェクト」が結成された。

ひまわりロードプロジェクトでは、『「楽しい」と思ったことは、「すぐに」、「できることから」、「まずは」やってみる、でも、「背伸びはしない』』をモットーに、その名のとおり、地区内の農道や農業用施設の周辺でひまわりの植栽を行った。

また、平成22年からは、30年ほど前に途絶えていた集落の夏祭りを復活させるため、「ひまわりロードまつり」を開催している。祭りでは、転作田にひまわりを植栽して制作した迷路においてタイムトライアルレースを行い、子どもたちの人気を集めている。レースの参加者数は、平成21年度の18名から平成24年の46名（祭り全体の参加者は約300名）に増えている。

レースの実施により、集落内外から多くの参加者が訪れ、他地域との交流の大きなきっかけとなっている。なお、ひまわりロードまつりや、ひまわ



写真3 ひまわり畑での結婚式

り畑で「ひまわりロードプロジェクト」のメンバーの結婚式を行ったことなどが新聞に取り上げられ、ひまわりロードプロジェクトの活動が「田代集落」の情報発信に役立っている。

## (2) 集落内に対する情報発信

ひまわりロードプロジェクトは、活動の開始を機に、集落住民に活動内容を周知するため、平成21年9月から毎月1回、「公民館だより」を発行しており、集落内の8つの班に回覧されている。

記事の内容は、集落住民に対する取材に基づいた集落内の時事情報が中心であり、集落の高齢者等からは「今の田代がどうなっているのかよく分かる」といった意見が多く、住民間の会話のきっかけとなっている。

## (3) 地域資源を活用した取組

祖父母世代との交流を深めるため、集落内で生産されたそばを利用したそば打ち大会等を実施し、集落内の連携や世代間の交流をより一層図っている。

また、平成22年からは、集落内で生産されたひまわりの種から食用油を搾油する取組を実施しており、選別、搾油及び瓶詰め of 全行程を集落住民自らが手作業で行っている。食用油については、ひまわりの作付面積が少なく、搾油量も限られることから、住民に無償で配布を行い、取組の周知や活動の成果を実感させることに活用している。あわせて、集落内の児童に搾油作業を体験させることで、食物のありがたさや農業に対する感謝の意識を醸成させる食育活動としても役立てている。

さらに、BDF（バイオディーゼル燃料）の活用に向けた試みとして、ひまわり油の廃油を回収し、精製した油をイベント時の発電機燃料としている。

## (4) 地域資源を守り続ける心の継承

当集落の起源は、集落内に湧き出る豊富な湧水にあり、農業用水だけでなく生活飲用水としても集落住民に恩恵を与えていた。そのため、古くから農家・非農家を問わず、集落住民の「水」に対する感謝の念は強く、水を保全する意識が共有されていた。

この「水」の恵みに感謝し、地域資源を住民全員の財産として目に見える形で表すためのシンボルとして、平成24年に、集落内の水路沿いに水車の建設を行った。建設に当たっては、住民から資材の提供を受けるとともに、集落内における技術者からの指導を仰ぎながら、住民の手作りで完成させた。なお、平成25年には水車を利用して小水力発電を導入し、防犯灯を設置することを計画している。

また、「天宮隧道」については、先人によって築かれた貴重な地域資源として継承・保存の方策を模索中であるほか、集落に存する「田の神さ



あ」については、管理や供花が常に行われていることから、住民の中でこれらを地域資源として守り続ける気持ちが脈々と受け継がれている。

#### (5) 集落の生活観を具現化する伝統文化の継承

当集落では、「十五夜祭」、「竹はしらかし」（竹で組んだやぐらに火を付け、正月飾りや古くなつたお守りを焼く正月の厄払いの行事）等、旧薩摩藩で見られた行事が現在でも数多く受け継がれている。中でも、五穀豊穡を祈願する祭りとして、隣接する今西集落の「香取神社」と田代集落の「天宮神社」との合同で行われる「打植祭」は、平成13年に宮崎県無形民俗文化財に指定された貴重な伝統行事である。



写真4 伝統行事「打植祭」

少子高齢化の進行により、伝統文化の継承が危惧されていたが、「ひまわりロードプロジェクト」を仲介役として、高齢者クラブや子ども育成会などの関係団体が密接な協力関係を築き、記録映像の保存や、甘酒、しめ縄づくり等の技能継承などを集落全体で行っている。

なお、高齢者の話に基づくと、当集落には「兵児踊り」や「鎌踊り」などの郷土芸能が過去には存在していたので、今後はこれらの踊りを復活させるため、調査を行う予定である。

田代集落では、このような伝統文化を継承する活動を通じ、集落の一体感と世代間の親交を深めている。